

奈良・平城京跡(3)

は希薄となつた。

木簡は、この落ち込みSX○二から一点出土した。SX○二は、

- 1 所在地 奈良市四条大路五丁目
- 2 調査期間 二〇〇六年(平18)六月~八月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 岡田憲一・重見泰
- 5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代~鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平城京跡右京四条一坊九坪の西北部に相当する。調査の結果、奈良時代の落ち込み、井戸一基のほか、平安時代から鎌倉

時代にかけての東西溝一条、粘土探掘坑六基などを検出した。中世の東西溝SD○



(奈良)

一は、当初三条大路南側溝の可能性が考えられたが、その下面で平安時代には埋没していたと考えられる落ち込みSX○二を検出した

ことから、南側溝の可能性

は、暗紫灰色シルト質粘土で、平城宮Ⅲの土器(七三〇~七五〇)を主体とする土器、瓦類のほか、多くの木製品が出土しており、木簡もここから出土した。上層はオリーブ灰色砂混粘土で、平安時代の遺物を含む。なお、中層と上層の間で、集中廃棄されたと考えられる遺物群を検出した。それらの土器は概ね平城宮Vの土器(七六二~七八四)に比定される。

落ち込みSX○二の形成時期は明らかではないが、当該地点周辺は旧秋篠川の流路にあたると想定されることから、開析された谷が埋め立てられることなく窪み、湿地状を呈していたものと考えられる。遺物は、近隣からの廃棄行為によつて集積されたものであろう。なお、奈良時代の井戸SE一五からは、「日」と墨書された須恵器杯Bが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「十一」十七□十一子□十一□□七七七□十一

〔可
可
可
可
可〕

・「七□七□子□一□□□□□□七□十一□

(31.9)×30×7 019

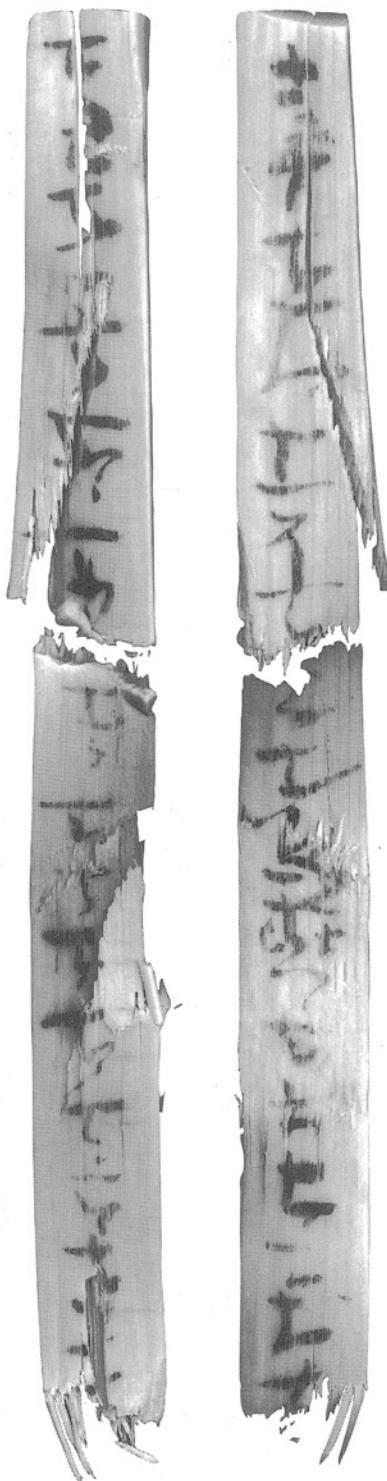
上端及び左右両辺は削り調整が施され原形をとどめているが、下端は折損する。板目材である。墨書は両面にあり、いずれも文字は明瞭であるが、全体的に字形が整わず、筆の運びも不安定である。墨書の内容には特に意味的なまとまりはないようで、同じような文

字を繰り返していることからみて、習書であろう。釈文は、墨書に最も近い文字を選んだが、どのような文字を書こうとしていたのか厳密にはよくわからない。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 二〇〇六年度(第一分冊)』(二〇〇七年)

(1-7-9 岡田憲一・重見 泰、8 鶴見泰寿)



2006年出土の木簡